

西武文理大学における「対人関係演習科目」の独自性

Interpersonal Relationship: Originality in the Subject
Introduced at Bunri University of Hospitality

金子章予
Akiyo KANEKO

サービス経営学部研究紀要 第28号

2016年(平成28年)7月29日抜刷

西武文理大学

西武文理大学における「対人関係演習科目」の独自性

Interpersonal Relationship: Originality in the Subject Introduced at Bunri University of Hospitality

金子 章 予
Akiyo KANEKO

要旨

西武文理大学における「対人関係基礎演習」・「対人関係応用演習」は、将来、日本のサービス産業を導く人材を養成する当大学のコア科目として、当大学の前身である文理情報短期大学で実施していた「社会関係演習」を、個人の確立を土台とした真の対人関係能力を養成することを目的として、主として教育学と心理学の知見から再編成し直した科目である。

本科目群は、本科目群の創設以来、学生の対人関係能力を高めてきたことが、学期末に行われてきた独自のアンケート調査や学生によるレポートから明らかにされている。本研究ノートにおいては、対人関係演習の独自性について検討することにより、本科目群の本質を明らかにする。

Abstract

Bunri University of Hospitality introduced Interpersonal Relationship as a core subject in its curriculum. From the results of questionnaire surveys carried out at the end of terms and a number of term reports written by students about the subject, it was revealed that that this subject has shown positive effects on students' skills in interpersonal relationships ever since its introduction in the curriculum.

In this research, the essence of the subject is analyzed from the viewpoint of its originality.

[キーワード]

対人関係、アクティブ・ラーニング、体験学習

Keywords : interpersonal relationship, active learning, experiential learning

1. はじめに

西武文理大学における「対人関係基礎演習」・「対人関係応用演習」(以下、「対人関係演習」と称する。)は、日本のサービス産業を導く人材を養成する当大学のコア科目として、当大学の前身である文理情報短期大学で実施していた「社会関係演習」を、個人の確立を土台とした真の対人関係能力を養成することを目的として、主として教育学と心理学の知見から再編成し直した科目である。

本科目は、本科目の創設以来、明らかに学生の対人関係能力を高めてきた¹。その秘訣は何なのであろうか。

本科目は、他の数多くの対人関係に関するテキストやワークブックと同様、Kolb (1986)の経験学習モデルをその具体的な授業方法として採用している。しかしながら、西武文理大学における対人関係演習には、一般的なアクティブ・ラーニングあるいは体験学習とは異なる独自性が存在する。

本稿においては、西武文理大学における対人関係演習の独自性について検討する。

2. 対人関係演習における学習方法と類似学習方法

ここでは、対人関係演習の独自性を理解するために、対人関係演習における学習方法と類似学習方法を比較検討する。

2.1 対人関係演習とアクティブ・ラーニング

西武文理大学における対人関係演習は、近年脚光を浴びているアクティブ・ラーニングの一つである²。

アクティブ・ラーニングとは、授業者(教授者・教員)による「授業」から、受講者(学生・生徒)による「学び」へと視点を180度シフトさせた教授=学習法であり、学び手が主体となって自ら学びとる学びの方法を指す。

しかし、アクティブ・ラーニングは、受講者だけで全てのことを学びとることを意味しない。もし受講者だけで学ぶことができるのであれば、授業者がそこに介在する授業は必要なくなるであろう。しかしながら、アクティブ・ラーニングとはいえ、授業者も一人の重要なアクターとして役割を果たす「授業」というものは必要である。

それは知識を授けるためではない。そこでは、知識とスキルが十分でない受講生が、知識やスキルを有する授業者との適切なインタラクションを行うことにより、その中でより適切な知識やスキルを自ら獲得していくことが目標とされる。西武文理大学における対人関係演習の独自性は、ここが強調されるべきであろう。

2.2 対人関係演習における「体験学習」と高校までの「体験学習」

対人関係演習では、その教授学習方法として、「体験学習」³という方法が採用されている。しかし、ここで注意しなければならないことがある。それは、対人関係演習における「体験学

¹ 本科目の構想の中心人物である新井浅浩元本学教授の指導のもと、筆者は、本科目群創設以来、独自のアンケート調査を無記名式で行ってきた。その結果、本科目の効果が明らかとなっている(金子2004)。

² 「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」(文部科学省(2012)の「用語集」p.38.)

なお、本科目が、本学の前身の文理情報短期大学時代(1989年~1999年)の「社会関係基礎演習」をその土台としている点において、本学はアクティブ・ラーニングの先進校と位置付けることができる。

習」は、義務教育段階で奨励されている「体験学習」や高等教育段階での「体験プログラム」等とは異なる、という点である。

対人関係演習においても「体験」を重要視するが、対人関係演習においては、課題を体験すること自体を目的としているわけではない。対人関係演習における「体験学習」の「体験」には特別の意味がある。

とくに高校までの体験学習は、学習内容に関する生活体験や実地体験が十分ではないと考えられる生徒や学生たちを対象に、教科学習においてその指導目標達成の手段として実体験を取り入れることにより、様々な教育効果を得ることを目的とする一連の教育活動を意味している(文部科学省2008)。

それにたいし、対人関係演習における「体験学習」は、逆に誰でも自分なりにある種の対人関係のあり方を身に付けている(学習している)ことを前提に、一般的にはある程度構造化された課題によって生起される「体験された「気づき」」を中心とした学習方法により、これまでの経験によって創られた自己の殻を破って新たな自己(あるいは本当の自己)を生み出すとともに、他者とともによりよく生きることのできる能力を培う教授学習方法である⁴。

すなわち、対人関係演習における「体験学習」の「体験」とは、単なる体験を指す言葉ではなく、またそれは、課題を体験すること自体に付与された言葉というよりも、「構造化された授業内容」と、その中で引き起こされる「対人関

係における成功や失敗(問題)などの体験(体験全体の中の個別の成功体験・失敗体験)にたいする「気づき」とを、その本質としている。

高校までの体験学習と対人関係演習における体験学習とでは、両者とも、「体験」を重んじている点ならびに「社会性や共に生きる力の育成」「豊かな人間性や価値観の形成」をその教育的意義として挙げている点において共通しているが、①その「体験」の意味するところ、②受講生の特徴の違い(経験の有無)、そして③その目的、という三つの観点から見れば、これらは別の教授方法ということが可能である。

2.3 対人関係演習における「体験学習」と対人関係トレーニングにおける一般的な「体験学習」

2.3.1 Kolbの「経験学習モデル」の適用

すでに述べたように、西武文理大学の対人関係演習科目の運営に当たっては、Kolb(1984)の「経験学習モデル」(具体的な経験→内省的な観察→抽象的な概念化→積極的な実験→具体的な経験)を使用している。本学における「体験学習」のサイクルを、Kolbの体験学習のサイクルに適用すると、次のとおりとなる。

まずさまざまな課題を自ら実践することにより、①自己のもつ対人関係における何らかの成功や失敗について気づく。つぎに、②その気づきについて考察する。そして、③その気づきの事象の原因を分析する。さらには、④その気づきにたいする自分自身の行動指針として具体的

³ 教育学や心理学では、一般的に、「学習」を「経験によって、知識、スキル、信念に変化が生じること」と定義している。もし、ここでいう経験と体験をほぼ同じ意味と解釈した場合、「体験から学習する」という表現は、同義語反復である。しかし、体験学習とは、単なる体験から学習することではなく、質の高い体験あるいは構造化された体験から新しい知識、スキル、信念を獲得することを指す。「人間と外部環境との相互作用である経験」(Dewey 1939)の質を高め、それによって「学習」の質を高めることは可能である。

⁴ この点において、対人関係演習の体験学習と類似しているのは、現在主としてビジネス・スクールで採用されているケースメソッド教授法である。とくに、経験のある者(大人)が自己と向き合い、新たな自己を獲得することを支援する方法という点において、ケースメソッド教授法と対人関係演習における体験学習とは極めて類似していると考えられる(竹内2010:114-132)。

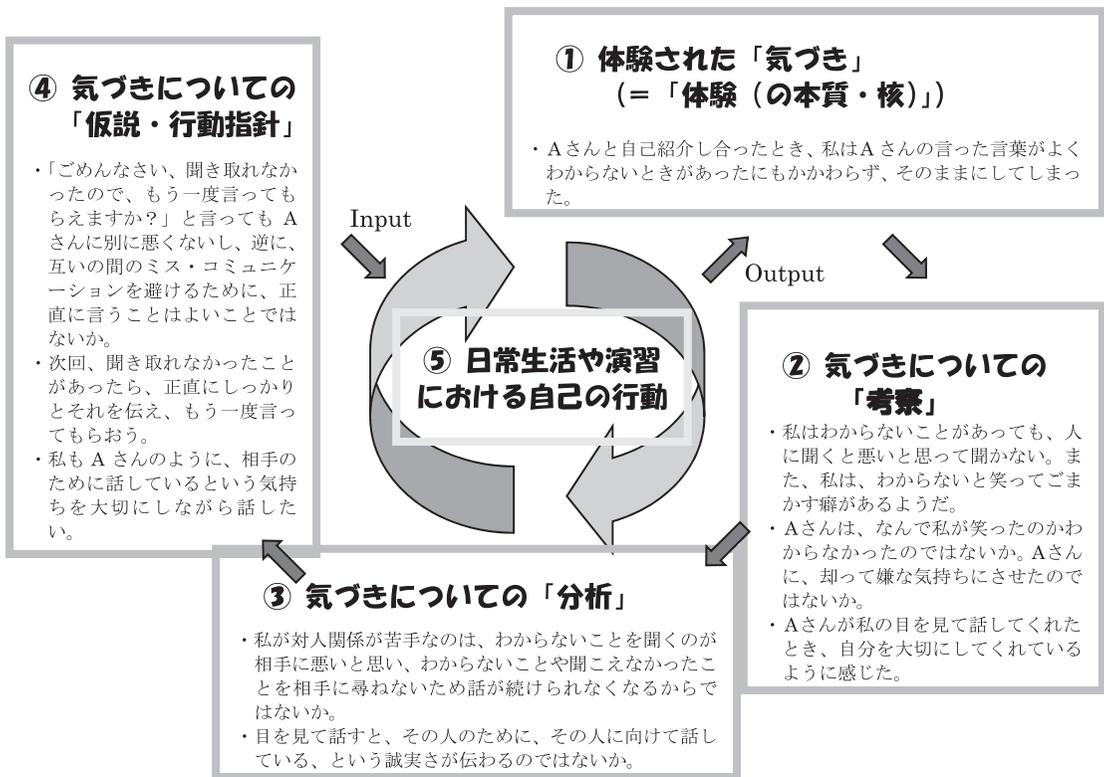


図1 対人関係演習における体験学習のサイクル

な仮説を立てる。それを、⑤仮説を実際に行動・応用し、自己の行動の内容と質を高める(図1)。

それは、絶えず新たな自己を生み出すサイクルであり、学習者の成長のサイクルでもある。なぜなら、人間の成長の本質は、新たな視点や能力の獲得という新たな自己の獲得にこそ存在するからである。

2.3.2 対人関係演習における体験学習の二重構造

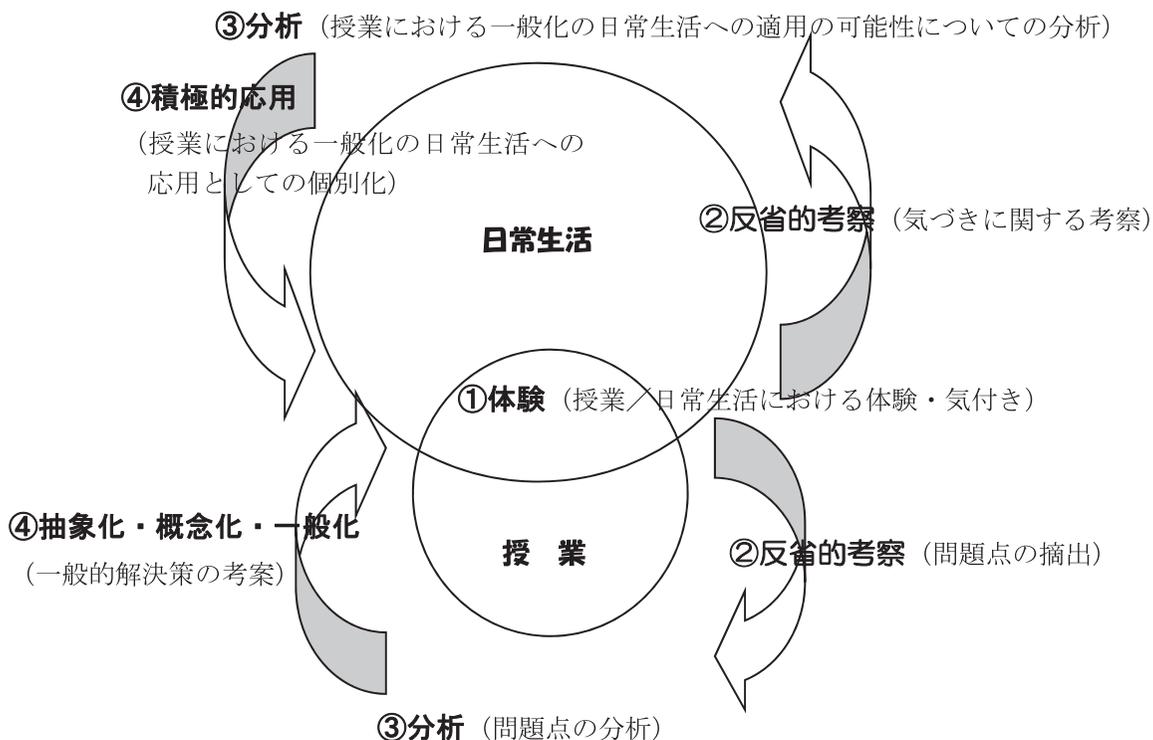
図1は、本学の対人関係演習における学習のサイクルとしては、実は、不十分である。すなわち、Kolb (1986) の体験学習のサイクルは一重のサイクルとなっているが、本学の対人関係演習は、授業と日常における二重のサイクルを生み出し(図2)、それを学生に実践させる仕組みとなっている。

通常の体験学習のサイクルは、①授業やプロジェクト等における体験→②考察→③分析→④一般化(→①)という過程を指す。しかしながら、本学における対人関係演習科目においては、このサイクルの他に、この過程を日常生活における気づきへの応用を促進するため、①日常生活の個別のできごとにおける体験→②考察→③授業における一般化の適用可能性の検討→④個別化、という逆のサイクルをも循環させ、受講生が日常生活において応用することにより、汎用的なスキルと同時に個別的な応用スキルを身に付けることを最終的な目的としている。

2.3.3 「振り返り」の構造化としての「プロセス・シート」

体験学習においては、演習(ワーク)において体験された「気づき」を確実な成長の契機と

日常生活における体験学習のサイクル



授業における体験学習のサイクル

図2 対人関係演習の構造 (二重サイクルの体験学習)

するために、ワークの「振り返り」が不可欠である。本学の対人関係演習においては、やったこと（ワーク）そのものを振り返るのではなく、気づきを中心としたプロセスを振り返ることに焦点を当てるため、通常の「振り返りシート」のことを「プロセス・シート」と呼び、独自に構造化している。学生は、「プロセス・シート」を、次のように書き進めていくよう指導される。

(1)気づき (体験)

まず、気づきのリストアップである。今回の演習について、結果そのものよりも、プロセス（課題達成の過程）について振り返る。良かったこと、問題に感じたこと、気になったことなどを簡単に箇条書きでリストアップする。気に

なったことであれば、どんなことでも構わない。自分の感情や思いに発言権を与えるように奨励される。何をやっているときに、ワクワクした（楽しく感じた）のか、イライラした（不満・残念に感じた）のか、ハラハラした（不安に感じた）のか、ウキウキした（嬉しく感じた）のか、簡単に書いてみるよう促される。

(2)考 察

次に、気づいたこととしてリストアップしたものの中でとくに気になること（1～3つ程度）について、そのとき、自分や関係者（グループのメンバーや自分の周りの人、日常生活だったら家族や友達など）はどのような状況（行動、表情、考え、感情など）だったかを振り返って

考察する。

(3)分析

さらに、考察で取り上げたことについて、その行動、表情、考え、感情などの原因は何だったのかを分析する。

(4)仮説と行動指針 (一般化)

今回のワークの中で気づいた、良いと思われることであっても、失敗だったのではないかと思われることであっても、分析にもとづき、それらのことをよりよくするためには、あるいは成功体験をより確実とするには、今後どうしたらよいのかという仮説、その仮説を実際の行動に移すための具体的な方法を考え、書く。

(5)体験学習のめざすべきところとしての新しい自己の獲得

プロセス・シートの記入をしたらおしまいではない。ここでの仮説と行動指針を日常生活や次回の演習で実践しなければならない。そうすることにより、その仮説を検証し、よりよい対人関係の在り方を少しずつ築いていき、新しい自己を獲得することにこそ、対人関係演習のめざすべきところが存在している。

3. まとめ

以上において、本学における対人関係演習の独自性として、1)「体験」の意味の特化、2)「体験学習のサイクル」の二重化、3)「振り返り」の構造化としての「プロセス・シート」について明らかとした。

限られた時間において最大限の効果を生み出すために、本学の対人関係演習の中では「構造化された学習内容・学び」を担当教員が一丸となって実現しようと努力している。このことは非常に重要なポイントである。林 (1977) は、「授業とは、子どもの内にひとつの事件を引き

出すことだ(p. 22)」といい、また、稲垣(1995: 232)も、適切な授業においては、教師による子どもの認識の「ゆさぶり」がなされていることを指摘している。このような「事件」や「ゆさぶり」を引き出すためのツールが教材となる。

今後、受講生の中に適切な「事件」や「ゆさぶり」を引き出すために、より適切な教材を開発していきたいと思っている。

謝 辞

なお、本研究は、西武文理大学サービス経営学部における平成27年度の共同研究の一部である。本研究に資金的援助をいただいたことに、大学にたいし、心よりの感謝の意を表したい。

参考文献

- Dewey, J. (1939) *Experience and Education*, Kappa Delta Pi Lecture.
- 林竹二 (1977) 『教育の再生をもとめて—湊川でこったこと』筑摩書房.
- 稲垣忠彦 (1995) 『授業研究の歩み1960~1995年』評論社.
- 金子章予 (2004) 「西武文理大学における「対人関係演習」の科目評価」西武文理大学サービス経営学部研究紀要、第5巻、12月10日号、pp. 75-88.
- Kolb, David (1984) *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice-Hall.
- 竹内伸一 (2010) 高木晴夫監修『ケースメソッド教授法入門』慶応義塾大学出版会.
- _____ (2010) 「非指示的に教えるということ—学習者が自己と向き合い、新たな自己を獲得することを支援する教え方」、高木晴夫監修・竹内伸一著『ケースメソッド教授法入門』慶応義塾大学出版会、2010年、所収、pp. 114-132.
- 文部科学省 (2008) 『体験活動事例集—体験のススメ』.
- _____ (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』(平成24年8月28日中央教育審議会資料).